



年男・年女インタビュー

2016年は申年です。

年男・年女となる方々にお話をうかがいました。
新年の幕開けにどんな思いを抱いているのでしょうか。



石井 寛さん
昭和31年6月生まれ

私はみかん農家と食料品店を営んでいます。また、宮原小学校で学童保育の活動もしています。
学童保育では、子どもたちが宿題をしたり、遊んだりしているのを見守ったり、時には一緒に遊ぶこともあります。
子どもと遊ぶのは体力が必要ですが、私も人一倍体力があります。中学時代には野球、高校・大学では陸上競技に取り組み、卒業してからはスイミングのコーチをしていました。
今も昔も子どもと接しているときは本当に楽しいです。

2016年が始まって・・・

今年も健康で、家族仲良くあれらと思っています。

今年の目標

みかんの収穫シーズンは体重が減るのですが、この体重を維持するために、ウォーキングをしたいと思います。健康第一ですね。

新しくチャレンジしたいこと

自分が取り組んできた陸上競技を子どもたちに教えられたら、と思います。陸上競技は努力すれば報われます。選手の技術の向上には、指導者の力が大切で、選手の能力や状態を見極められるようなコーチになれば、と思います。



中本 真奈美さん
平成16年2月生まれ

私は小学1年生の時から柔道をしています。最初に体験教室に行って、楽しそうだなと思ったので、始めました。
練習は週に3回あります。始めてから2～3年はずっと負けていましたが、教室に通い続け、小学5年生で出場した県の大会では優勝することができました。そして昨年、6年生でも優勝して全国大会へ行くことができました。
教室では技の研究がとても楽しいです。先生が投げ技を教えてくれるので、それを聞いて研究しています。先生は優しく、わからなかったら、すぐに教えに来てくれます。
教室には友だちがいて、休憩時間に一緒に話している時が楽しいです。

2016年が始まって・・・

今年が中学生になって、学校が変わります。新しい友だちをつくって、仲良くしたいです

今年の目標

中学校でも柔道を続けて、県で1位になりたいです。

将来の夢

警察官になりたいです。まちを守ってるってすごいなと思います。

広告



このコーナーは、地域の課題解決について研究している龍谷大学政策学部の学生の皆さんが取材しました。
有田市でのフィールドワークなどでの活動を通じて感じた「縁側」の魅力を多くの人に伝えるため、学生自ら取材を行い、記事を書いています。
今回は、有田市消防署で訓練中の隊員の方々へ取材し、代表で木下さんにお話を伺いました。
※ここでの「縁側」とは、「ホッとできる自分の居場所」という意味です。



木下 裕之さんと消防署の隊員たち

つい深呼吸して、万歳するように身体を伸ばしてしまおうと快晴に恵まれたこの日、私たちは有田市消防署へ向かった。この消防庁舎は建設されてまだ2年ということもあり、近代的な落ち着いた雰囲気であった。今回インタビューに応じてくださったのは、消防士歴30年の木下さん(箕島在住)。とても気さくでアクティブな方であり、かつ現場での真剣な顔も垣間見えた。



→木下さんの思い出の場所

場であって、放課後になると連絡せずとも友人たちと山に集まり、探検しながら自然を味わい尽くしていたそう。

夏になると、当時宝物くらい価値のあったヒラタクワガタを手に入れるため、木を定めて皆必死にワクワクしながら探していた。また、山の中にある防空壕では大量のコウモリに遭遇して仰天し、友人達と逃げ回ったことも鮮明に覚えている。

そして、このように自然の中で遊んできた少年時代の経験が今の仕事に活かしている。たとえば、緊急時の山での災害や事故に駆けつけた時、地形や水の在り場所が全て把握出来るため、消防活動を無駄なく素早くこなす事が可能となっていることである。

幼い頃から山を遊び場とし、憩いの場として過ごしてきた木下さん。きつとこれからも有田市とまちの人を守り続けていくことだろう。



左から 山本龍、仁木貴康、山之内寛人

取材を終えて・・・

今回、インタビューをさせていただき私達学生と過ごす時代が違うことで自然、森の見え方がとても違うのかと驚くことばかりであった。遊び方はこの20年間で大きく変化し、ゲームが普及し、一人でも遊べるのが当たり前前の時代となった。しかし、今回の木下さんの話を聞いて、「羨ましい」と感じる瞬間が何度もあった。人と自然と触れ合うからこそその遊びのおもしろさ、わくわく感は今では感じにくいものではないだろうか。有田市だからこそ味わうことの出来る、森と触れ合うおもしろさ。みなさんも足を運んでみてはいかがだろうか。

広告

